

2022年9月18日 敬老の日礼拝(聖霊降臨節第16主日礼拝)

メッセージ「愛(I)は間に」

おかじまちひろ
岡嶋千宙伝道師

聖書 ルカによる福音書 17章20-21節

幼いころ、よく聞いた、というか聞かされた問いがあります。「大人になったら何になりたい?」親、先生、親戚のおじちゃん、となりのおばちゃん。聞かれる度に困りました。大人になったことがないので分からない。自分では答えを見つけられないから、とりあえず周りにある情報の中にヒントを得ようとして、一時期、テレビによく映る人、「総理大臣になりたい」と答えていたこともありました。大人たちの反応は微妙で、そんな答えを期待しているのではないことに気づき、他の子どもたちの答えを観察してみました。どうやら、自分の好きなこと・得意なことの延長で答えれば良いらしい。いつもおしゃれでかわいい服を着ている子は服屋さん。お花が好きな子は花屋さん。バスケットがうまい子はスポーツ選手、などなど……。 「なるほど!」。 ですが、問題発生。自分には、これとって、好きなこと、得意なことが見当たらない。当面は「総理大臣」、時に趣向を変えて「大統領」、などという答えを繰り返しながら、当時はその二つの違いは全くわからなかったのですが、考えに考えたあげく、ようやく行き着いたのが、何かを作るということ。学校の課題などで強制されると絶対にしないけれど、自分が興味をもって取りかかったら、時間を忘れて創作に没頭するということが何度かありました。ということで、物作りが好きということに気づいてからは、「模型を売るお店」、昔で言うと「プラモデル屋さんになりたい」と答えていました。あれから、数十年、「大人になったら…」と問われることはなくなって、今度は、「大人になってみたら…」ということを考える年になりました。

一日一日、一年一年と、年齢を重ねていった結果としての今。あの時の答えとは異なる生き方。総理大臣でも、プラモデル屋さんでもない。キリスト教の牧師。当時は、牧師はもちろんのこと、キリスト教ということも想像すらしていませんでした。後悔はしていません。ただ、子どものころに必死になって考えたのとは異なる歩みをしている自分の姿に驚かされます。なんとなくですが、子どものころは、大人にな

るというのは、自分が思い描く夢や目標に向かって、もちろんそんな夢や目標がしっかりあっての話なのですが、そこに向かって、自覚的に、前向きに、思い通りの歩みを進めることなのだと思います。それができるようになるのが大人のだと。でもいざ、自分がその大人になってみて、改めて思うのです。年を取るというのは、そんなに単純ではない。平坦ではなくて、凸凹で、不確実。大人の階段を登るのは、険しいのだと。今思えば、年を取ることの現実を伝えずに、「大人になったら・・・」と子どもに質問するのは、すこし残酷かなと感じなくもありません。ですが、そう感じながらも、自分の子どもに向かって「大人になったら何になりたい？」と平気で聞いている自分に、「はっ!」とすることもあったり。

全部とは言わないけれど部分的に、今なら、分かります。人生の歩み、この世での歩み、不確実なことがいっぱい。思い通りにいかないことの連続。人生バラ色、ではありません。奥歯を噛み締めて苦悩することなんてしょっちゅうです。夢や目標を見失うこともあるし、前向きになれないこともあります。楽しいこともあれば苦しいこともあって、喜びも悲しみもごっちゃごちゃ。社会の中で善いと思われていることとは正反対のことがまかり通ることもあります。まさしく不条理。聖書の中にも、世の中の不条理を語る言葉が記されていますが、それは、一人の人生についても当てはまるでしょう。「空の空。一切は空。」(コヘレトの言葉 1:2)一人の人生が、不確実で、^{はらん}波瀾に満ちたものなのですから、その一人が大勢集まった人々の社会だって、波瀾に満ちたものです。互いの思いを誤解して、意思疎通ができなくて、相手の存在を受け入れられなくて、仲が悪くなって、^{けんか}喧嘩することもあります。わたしは、連れ合いと、子ども、連れ合いの母である義理の母と、そしてトイプードルの、4人プラス一匹の家族で生活をしています。連れ合いは6歳年上、子どもは32歳年下、トイプードルは40歳年下、義理の母は40歳ほど年上。年齢も人生・犬生経験もまちまちの家族。不仲になることもしょっちゅうです。特に義理の母とは仲違いの連続。意見があわなくて、思いを通じ会えなくて、おっきな口喧嘩をしたかと思えば、次の瞬間に、顔をあわせずに全く口をきかないということもあります。年上の人に対しては、人生の先輩として、敬意をもって優しく接するべきということは、

わかってはいるのですが。自分の心の持ちようを変えて、実際の行動としてそうすることがなかなかできません。「あ————っ!!」となります。「どうしてうまくいかないんだ!」と。おそらく、わたしがそうなるのと同じように、義母もそうなっているのだろうと思います。お互いに良い関係を築きたいと願っているのに、現実にはうまくいかない。いや、それもまた、わたしの思い違いかもしれません。そして、その思い違いがまた仲違いの原因になっているのでしょう。

不条理な世の中。思い通りにはならない人生。不確実なことに満ちたこの世界。今から約 2000 年以上前、わたしたちと同じようにこの世界に生きた人イエスは、語りました。そんな、不条理な世界のただ中にこそ、神はいる。どこか特定の場所と時間に、ではありません。具体的な地点を指して「ここに」「あそこに」と言えるものではありません。「あなたがたの」、したがってイエスの言葉を聴く側からしてみれば、「わたしたちの間に」、神はいるのだと。「間」。神学的には、別の解釈が提示されるのですが、今日この礼拝で与えられた御言葉として、わたしなりに思う「間」の意味。それは、まず何より、人と人との間です。「あなたがた」と言われているのですから、わたしたちの、つまり人間の生きるところに神がいる。特定の誰かというのではなくて、全ての人にとって、隣人との間に、神がいるのです。全ての時代、全ての場所に生きる「わたし」が、「あなた」との間に紡ぐ関係のなかに、神がいる。人生経験の違い、生きる環境の違い、文化・思想の違い、そして、年齢の違い、様々な違いのある人々が交わるその間に神がいる。平穏で平和のときにはもちろん、互いに分かりあえず、小さな誤解のゆえに憎み、争い、傷つけあうときにも、人と人の間に、神がいる。そしてもう一つ。もっと個別的に、もっと個人的に、一人の「わたし」の歩みのただ中に、神がいる。キリスト教で信じられている神は、人が生まれる前からその人を知り、この世での歩みを終えたあとも、その人を生かす神です。ですので、厳密な意味での人生の始めと終わりはありません。ですが、この世での歩みということ言えば、それぞれにとっての始めと終わりの間に、その歩みの一つ一つに、神がいる。自分ではどうしようもないと思うものであっても、振

り返ったときに「何でこんなことを」と恥ずかしくなるようなものであっても、その一歩一歩に神がいる。

わたしの日々、わたしの一つ一つの歩みが神と共にある。わたしたちの日々、わたしたちの一つ一つの歩みが神と共にある。年を重ねる。きれいな、穏やかな、まっすぐな、一本道であれば、どれだけ良いのかと思います。一人一人がそんな年の重ねかたをすれば、互いに、同じ道を辿った者同士、理解し合い、争うこともなく、尊重しあって、平穏で平和な世界を築くことができるはず、と思います。でも、想像してみてください。見通しの良い、安全で平坦な道、変化のない道を、決まった順番で、決まった通りに生きる。同じ人生を送っている人たちが生きる社会。皆が同じ歩みなのですから、必要以上に、他の誰かに興味を持つことがなくなるでしょう。人と人との交わりは淡白で面白味のないものになるでしょう。そして、しまいには、人間同士の交流がなくなっていくかもしれません。凸凹だからこそ、不確定だからこそ、曲がりくねっているからこそ、回り道だからこそ、違うからこそ、素敵だと思えることがたくさんあります。そんな人生だからこそ「生きる」感覚を多いに豊かに感じられることがあります。お互いに違うからこそ、人と人との繋がりが、共に生きる交わりが生まれるのです。そして、神はそんな歩みを、一人一人が辿る凸凹な、変化に満ちた人生を「良し」としているのです。一人一人が、様々な道を、様々な苦悩しながら歩んできた人生、これから歩む人生。その歩みを共に分かち合う時と場としての教会。若い人も、年を重ねた人も。元気な人も、しんどい人も。それぞれが神と共に歩む日々。その日々を、苦しみも楽しみも、悲しみも喜びも、ひっくるめて、分かち合う。分かち合うのではなくても、そっとそれぞれの存在を感じることができる。そんな人と人との間に、築かれていく教会。今日も、わたしの間に、わたしたちの間に、神が、神の子イエスが居続けています。わたしの間に、わたしたちの間に、愛であるイエスが、居続けています。その愛に感謝して、これからの日々を、わたしの日々を、わたしたちがともにある日々を、神のひとり子イエスを間において、歩んで参りたいと願います。